

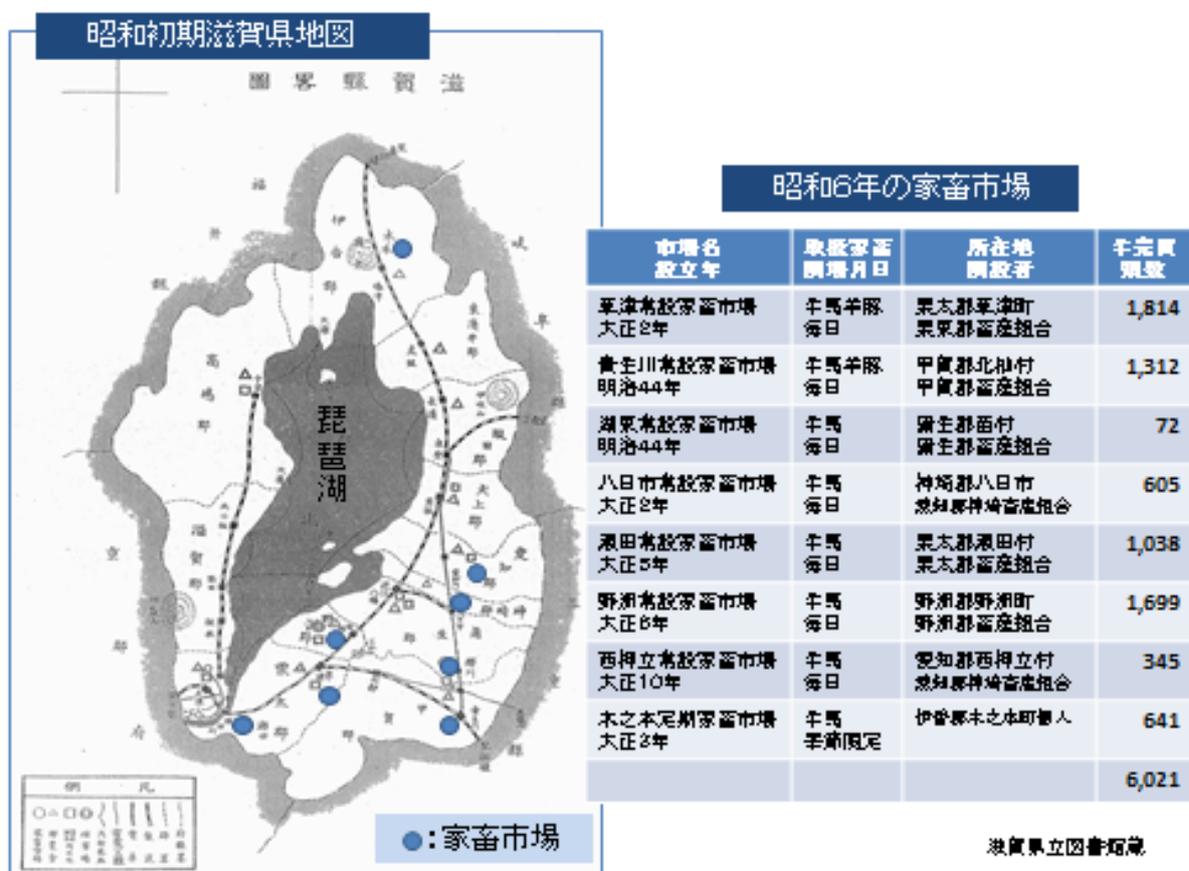
4 大正・昭和

昭和に入り、第二次世界戦争で大敗して、復興と発展の時期を迎える。戦後、食文化は欧米化して、急速に食肉の消費は拡大する。

一方で、耕耘機が普及するにしたがい農耕に役牛を使用しなくなり、牛は役牛の役目を終えることになる。その後は、牛肉生産のために飼育するものとなった。今まで、役牛としての改良が主な目的であったが、これ以降、肉用牛は肉質、増体等の改良となり、農家では肉用牛の繁殖や肥育をすることになった。肥育農家では規模拡大が進み、家畜市場、食肉市場などが整備され、直接、農家が購入・販売に係るようになっていった。

(1) 昭和初期の家畜市場と取引

8家畜市場が存在し、年間牛の取引は6,000頭ほどが取引された。明治には木之本家畜市場が最も取扱量が多かったが、昭和では南部の野洲、草津、瀬田、貴生川家畜市場において、多くの牛の取引が行われた。



(2) 牛の移出入

1) 大正5年の市郡における移出入頭数調査

大正5年においても、遠方では鉄道が用いられ、近隣からの搬送は陸路であった。市郡の移出入を見ると移入より移出が多いのは、栗太郡や野洲郡、滋賀郡、高島郡であり、自家繁殖を行うよりも、他の地域からの購入に頼っていたことになる。桜井厚、岸衛書の「屠場文化」には近江牛について、「県南部の栗東、草津周辺で浅い田圃に利用され、次に、蒲生郡、神埼郡、愛知郡など東部の二毛作地帯に引き取られ、深い田圃と畑作に使われる。」との記述がある。このことから、栗太郡は移入頭数が移出頭数を1,780頭上回っており、蒲生郡は1,629頭と移出が上回っているという結果になっている。

本調査の市郡の総計では、移入の方が上回った結果になっているが、実際は移入県である。このことは、上記で述べられているように、市郡での牛の移動があり、二重カウントしたことによるものである。

大正5年市郡移出入調査内容（滋賀県県民情報室）

市郡	移出 a			移入 b			a-b=差
	鉄道	陸路	計	鉄道	陸路	計	
大津市	48	0	48	85	0	85	-37
滋賀郡	167	355	522	352	455	807	-285
栗太郡	109	1254	1363	2649	494	3143	-1780
野洲郡	2	81	83	610	10	620	-537
甲賀郡	44	1200	1244	803	46	849	395
蒲生郡	6461	55	6516	4010	877	4887	1629
神埼郡	134	136	270	24	314	338	-68
愛知郡	0	274	274	14	382	396	-122
犬上郡	268	0	268	31	91	122	146
坂田郡	20	36	56	22	24	46	10
伊香郡	74	4	78	154	0	154	-76
東浅井郡	0	22	22	2	13	15	7
高島郡	0	49	49	16	331	347	-298
計	7327	3466	10793	8772	3037	11809	-1016

2) 蒲生郡における移出入

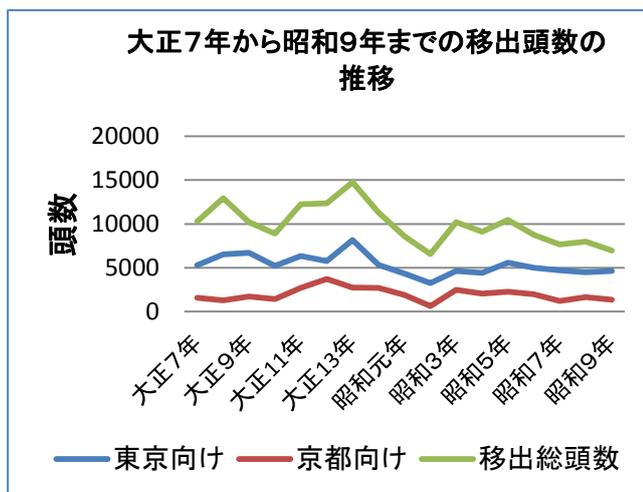
大正5年の蒲生郡の牛の移入では、兵庫県からの移入が最も多い。ほとんどの牛は役牛として移入され、移出ではほとんどが肉用牛として東京に移出されている。その多くが、鉄道で八幡駅から出荷されていたことが分かる。

大正5年における蒲生郡牛の移出入

移出				移入			
移出駅名	移出先	頭数	備考	移入駅名	移入先	頭数	備考
鉄道 八幡駅	東京	5,293	15%は雑種で	鉄道 八幡駅	岡山県	456	
八日市駅	東京	25	用途は全て肉	八幡駅	大阪府	5	
八幡駅	横浜	913	用牛	八幡駅	京都府	1,041	10%は雑種
八幡駅	岐阜県	3	雑種牛して乳牛	八幡駅	兵庫県	4,302	牛主として労
八幡駅	三重県	2		八幡駅	鳥取県	220	役用
陸路 朝日野村	三重県	5	全部和牛として	八幡駅	その他	110	
苗村	京都府	50	全て肉用牛	陸路 朝日野村	京都府	5	
	計	6,286		陸路 朝日野村	福井県	313	
				市辺村	京都府	7	全部和牛耕
				苗村	京都府	330	作用労役用
				苗村	三重県	220	
				西大路村	京都府	2	
						7,011	

3) 大正6年の県における移出

年間移出頭数は、1918年（大正7年）から1934年（昭和9年）では、7,000頭から14,700頭で推移した。最も多く移出された先は、東京と京都で、東京が46～61%を、京都が10～30%を占め、東京と京都を合わせると60～84%となり、多くの牛が大消費地と当時最大の観光地京都に移出されていた。



4) 昭和6年の県における移出入

移入は主に兵庫県、京都府、大阪府、三重県からされ、遠くは福井県、岡山県、広島県まで集めた。また、移出は主に消費地である東京都、観光地である京都であった。移入頭数は31,486頭で、移出頭数は46,265頭であり、県内で生産され役牛として利用され肥育後、移出された牛が14,779頭いることになる。

1926	昭和元年	47,921 頭	1934	昭和 9 年	15,083,000	9,049 t
1930	昭和 5 年	37,011 頭	1938	昭和 13 年	4,007,200	2,404 t
1935	昭和 10 年	66,765 頭	1940	昭和 15 年	2,415,000	1,449 t
			1942	昭和 17 年	1,060,800	636 t

(4) 近江肉牛協会の設立

昭和 26 年に日本で初めてブランドを確立するための団体「近江肉牛協会」が設立され、近江の関係者と東京の大手販売業者が一緒になって拡販に努めた。会長は服部知事が、副会長には織田栄五郎が就任した。組織の会員は、牛の集荷を行う滋賀の家畜商（集荷者）、生肉の販売者ならびに東京の卸売業者で流通に係わる者で構成されていた。

設立に貢献した近江の関係者		東京会員
集荷者	販売者	販売業者
織田栄五郎	西川竹次郎	松井鹿之助
森嶋正雄	高橋良一	寺田
中川甚九郎	島林秀夫	中野
徳田重太郎	村松源治	吉橋
西居忠一	福永儀三郎	吉岡
浅野弥五郎	高橋孫衛門	本田
津田謹二		井上
安井林之助		岩藤
岡山孝三郎		腰塚
安井岩之助		犬井
池川正三		天井
北川秀夫		勝川
		村上
		山勝
		今井
		有賀



初代の近江肉牛協会長と
なった服部滋賀県知事



織田栄五郎氏



森嶋正雄氏

昭和 27 年には、小型飛行機で 3 頭分の肉 (400g) をパラシュートでばらまき、昭和 29 年の近江肉牛東京宣伝記念誌によると、昭和 29 年 10 月には、白木屋での大宣伝会を催すなど活発な活動が行われた。大宣伝会は近江肉 13 頭を装飾トラック 4 台に乗せ、芝浦と場を出発し、行進し、展示場である白木屋の屋上に向かった。

芝浦と場 (品川) →北品川橋→五反田→白金猿橋→魚藍坂下→古川橋→一之橋→赤羽橋→六本木→霞町→青山六→渋谷駅前→原宿三→千駄ヶ谷→旭町→新宿三→片町→市ヶ谷見付→九段→神保町→小川町→須田町→岩本町→御徒町→厩橋→浅草橋→馬喰町→小伝馬町→水天宮前→人形町→小伝馬町→本町三→昭和通→白木屋 (日本橋) →エレベーターで 8 階屋上に

白木屋での大宣伝会の風景

近江肉牛東京宣伝記念誌より、昭和 29 年 10 月発行、近江肉牛協会



ゼリ風景最高値 22 万円でゼリ落とされた。堤衆議院議長 (右) 駆けつけ、花束を授与



芝浦と場（品川）からパレード



白木屋（日本橋）



到着し、トラックから降す



白木屋屋上での近江肉牛展示



屋上での近江肉牛せり

近江肉牛東京大宣伝会の出品牛の一覧である。これらの出品牛は全て雌、6歳で、体重も525kg～660kgである。近江牛としてこのような規格のものが出品されていた。飼育場所は蒲生郡が最も多い。

近江肉牛東京大宣伝会の出品

番号	名号	体重 (貫)	Kg	飼育者		出品者	
				住 所	氏 名	住 所	氏 名
1	はな	145	543.8	神埼郡永源寺村	川戸安蔵	神埼郡永源寺村	池川正三
2	とき	140	525.0	野洲郡篠原村	奥田藤一	近江八幡市	西川竹次郎
3	にし	162	607.5	愛知郡豊椋村	小西長三郎	愛知郡豊国村	徳田重太郎
4	つた	165	618.8	愛知郡東押立村	伊蔵伊右エ門	愛知郡豊国村	徳田重太郎
5	とよ	153	573.8	蒲生郡朝日野村	奥村彌右エ門	蒲生郡北比都佐村	織田栄五郎
6	おく	162	607.5	神埼郡旭村	河村仙太郎	蒲生郡苗村	岡山孝三郎
7	たみ	150	562.5	蒲生郡西小椋村	浅村十四郎	蒲生郡朝日野村	津田勤二
8	なか	165	618.8	八日市市	中島治平	八日市市	中川甚九郎
9	ひさ	141	528.8	栗太郡栗東町	芝原乙治郎	蒲生郡苗村	安井林之助
10	せん	140	525.0	近江八幡市	西川市太郎	近江八幡市	浅野武雄
11	とみ	141	528.8	蒲生郡朝日野村	北川音太郎	蒲生郡朝日野村	北川秀雄
12	おまつ	142	532.5	犬上郡西甲良町	松宮留吉	犬上郡東甲良村	宮川藤四郎
13	ひで	140	525.0	八日市市	村田与惣吉	八日市市	島林義雄
14	その	135	506.3	蒲生郡苗村	中江儀三郎	蒲生郡鏡山村	樋田勇太郎
15	まつ	161	603.8	蒲生郡市原村	松吉幸太郎	蒲生郡苗村	森嶋正雄
16	やす	176	660.0	蒲生郡朝日野村	奥田幸太郎	蒲生郡苗村	森嶋正雄
17	あさ	140	525.0	蒲生郡鏡山村	松瀬徳男	蒲生郡苗村	森嶋米夫

近畿東海北陸連合肉牛共進会優秀賞受賞者（上位3席受賞者一覧）

開催		雌牛の部		去勢の部	
回目	年度	住所	氏名	住所	氏名
第1回	昭和27年	愛知郡東押立村	磯部 吉助		
第2回	昭和28年	○愛知郡角井村	清水 清作		
第7回	昭和34年	八日市市	磯部孫四郎		
第9回	昭和36年	愛知郡湖東町	寺井金一郎		
第13回	昭和40年			蒲生郡竜王町	寺島 長次
第17回	昭和44年	愛知郡愛東町	植田 糸八		
第18回	昭和45年	○八日市市	藤田 善治		
万博記念	昭和45年	○愛知郡愛東町	田中卯三郎	愛知郡愛東町	植田 糸八
		八日市市	巽 源一		
第19回	昭和46年	八日市市	巽 源一	蒲生郡蒲生町	森嶋 正雄
第20回	昭和47年	○八日市市	西山 幸治		
		蒲生郡蒲生町	安田 忠蔵		
第21回	昭和48年			高島郡安曇川町	北川 昭男
第22回	昭和49年	蒲生郡竜王町	徳谷 安治		
第24回	昭和51年	○愛知郡愛東町	田中卯三郎	八日市市	中島 治男
第25回	昭和52年	八日市市	森 儀兵衛	高島郡安曇川町	北川 昭男
				○蒲生郡安土町	下沢 重光
第33回	昭和60年	坂田郡米原町	西山善代門		
第34回	昭和61年	○蒲生郡蒲生町	森嶋 正雄	○蒲生郡安土町	藤野 益司
		八日市市	深尾 正平		
第35回	昭和62年	○蒲生郡蒲生町	安田 良造	○蒲生郡蒲生町	津田康左衛門
第36回	昭和63年	蒲生郡蒲生町	安田 良造	八日市市	中川 昭八
第38回	平成2年			蒲生郡安土町	藤野 益司
第41回	平成5年			八日市市	中川 知晴
第42回	平成6年			○八日市市	中川 知晴
第45回	平成9年	坂田郡米原町	西山善之進	八日市市	中川 知晴
第46回	平成10年			○八日市市	中川 知晴
				八日市市	中川 知晴
第47回	平成11年			○八日市市	中川 知晴

第28回～第32回までは成績不明

○：最優秀賞受賞者



第1回近畿2府5県肉牛共進会優等賞（磯部吉助出品）

和種の改良基本方針1919年（大正元年）制定され、黒毛和種の固定化1944年（昭和19年）にすることができた。続けて、褐色和種と無角和種は昭和19年に、日本短角種は昭和28年に固定化された。

和牛（大正元年固定化始まる。）

黒毛和種（在来種に各種の外国種を交配） 昭和19年固定

褐色和種（朝鮮牛、韓牛に主としてデボン種、シーメンタール種を交配）
〔肥後牛〕 昭和19年固定

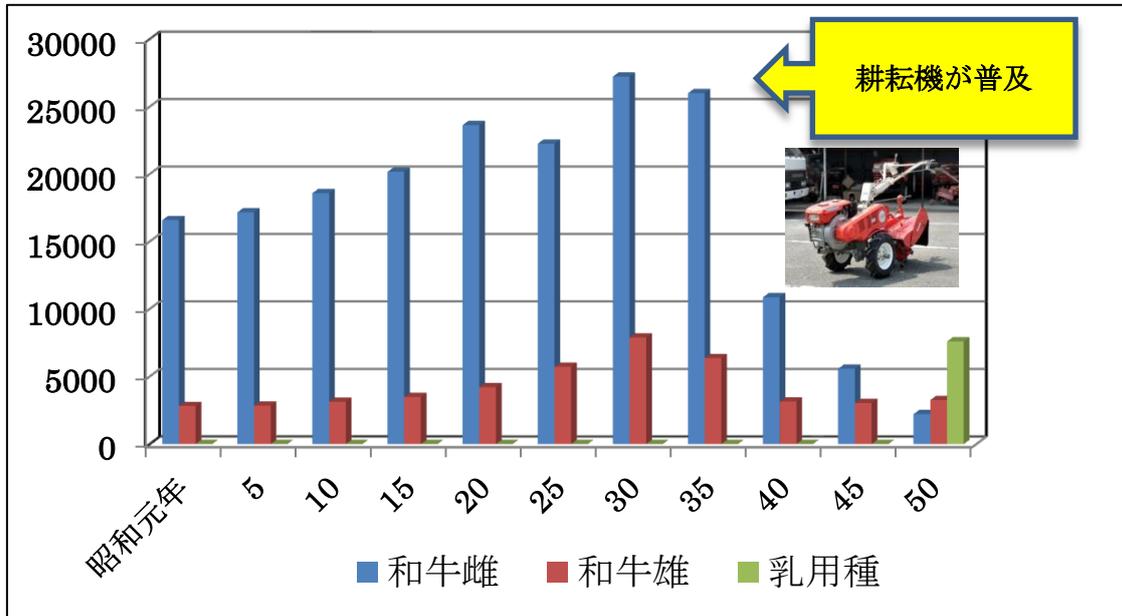
無角和種（黒毛和種に主としてアバディーアングス種を交配）
昭和19年固定

日本短角種（青森、岩手で飼育されていた「南部牛」にショートホーン種を交配）
「あかべこ」 昭和28年固定

（5）耕耘機の普及

昭和35年に耕耘機の普及が急激に進み始める。昭和35年には和牛は26,000頭いたものが、昭和40年には10,000頭ほどとなり、農村から姿を消すことになる。この時期近畿では、役牛は廃用され続け、近畿では膨大な牛肉を消費することになる。牛肉の供給が増加することにより、庶民には口にするのできなかった牛肉が庶民のテーブルに上るようになる。

鎌倉時代には役牛として「馬は関東をもってきとし、牛は関西をもって基とす」と書かれていたが、この時期を境に、「関西は牛肉、関東は豚肉」と言った食文化の定着が起こった。



耕転機が普及するにしたがい農耕に役牛を使用しなくなったことから、牛は役牛の用はなくなり、食するために飼育するものとなった。今まで、役牛としての改良が主な目的であったが、これ以降、肉用牛は肉質、増体等の改良となり、畜産農家では肉用牛の繁殖や肥育をすることになった。

このことは、肉用牛の流通を大きく変えることになる。肥育農家では規模拡大が進み、家畜市場、食肉市場などが整備され、直接、農家が購入・販売に係るようになった。

また、昭和40年後半になると、食肉需要がさらに増大し、今まで乳用種の雄子牛は子牛肉としてテーブルに上っていたが、乳用種雄牛去勢を肥育する技術が定着していった。大中農業協同組合においては、北海道に乳用雄牛を集荷・育成する牧場を設け、週に2回、大型トラックで搬送されるほど大々的に肥育が行われ、わが国の肉用牛肥育経営の近代化に大きく貢献した。